大岡政談

村井長菴調合机

元岡徹太郎編輯

四編上

へ14
873
10

門へ 14
帙 873
巻 10

元岡維則著
伊藤静齋畫

大岡政談 村井長庵調合机

聚榮堂藏版

大岡政談村井長菴調合机四編序

惡漢兇徒無世無焉堯舜之代尚有四凶況於
澆季之世乎我邦享保年間有德公之爲治也
舉能任賢賞罰能明稱天下至治矣方此時也
法官大岡越州有良吏之名在職殆十有八年
其所審判凡數百件無一不得其當也而可觀

明治三十九年十月購求

者有三曰天一坊曰畔倉重四郎三即此編之所謂村井長菴者也越州天資高邁聰敏有大智其聽訴也如見人之肺肝是非曲直明決如流實謂于公避三舍鄭渾讓一步豈可為溢美哉頃者元岡君依聚栄堂主人囑以著此書題曰村井長菴調合机請序余余受閲之不覚拍

案曰善哉此編勸懲之蹟如指掌紋足復警天下之為長菴者矣余以為元岡君之有此編徒非供婦女子一夕之話葢警天下之為長菴者也故讀此書者勿做演本稗史之看云爾

明治壬午孟春

霞舩岡田良策撰

町役人 長助

漁夫 桶市

秋來作客一身輕
長踏江山強獨行
故國同遊能健否
夢聞傳語未分明
元維則
本覚院主僧貞歴
徒弟

宮寄村農夫
茂藤次

村井長菴調合机　四編目録

第十九回　奇偶の一會義僕心事を語る
第廿回　一身乃流落毒婦他郷に死を
第廿一回　高士は深智少婦に奇計を授く
第廿二回　雨夜の對酒美婦陶商を欺く
第廿三回　一僧乃説諭賈人帰心を定む
第廿四回　肝膽を摧ひて智士出訴を決む

大岡政談　村井長菴調合机卷之十

東京　元岡維則編次

第十九回　奇偶の一會義僕心事を語る

劍法の優劣ハ人毎に同じうせず。多年の辛苦を積で。漸くして後。その奥儀を得る。身活壮ゆして力強く千斤を拳るとも。未習熟元手を越ぎんば。何ぞ常の人ふだも聞毎に倦ずとはん況。風呂の撃劍ハ莫耶を擊つとも益なきや必せり。去ば實に仁左こゝ欲ゞ二個ハ遥間まく遅き仁左こゝ業拙くして。服部を打落されけるゝ再び拾ひ丸んゝ遠も手。膽を冷して逃出さを。迷世ハ迷く進逼り。一刀を上段ゆ丸ゝ見ゝ。一撃

るゝ渡りより。鬩ふゝ切やげう。熟練の老婆國村が利刃何ぞ
以てたまるべき。仁丸と苦と一緒叫び。道の傍に撲と打倒る。逃世界の
職を打捨て。さこ次を目掛くゝ躍り掛まば。今い三次も辟易成し。
命を限りに此の場を逃げ。山の横合ふ別へつゝ。何國とも知ず身を
潜めぬ。只さへ物暗き深山路の。五月の闇に殺ハ暗く。遯世ハ知地
三次を見失ひ。術なくゝ辻堂の前に取て返し。破伏せたる戸を改
見るに。乳の下まで破込なまバ。憐むべし息ハ絶たりける。此に於て血
刀を拭ひ鞘ふ納め。忍静に堂前の精火を消し。沖見ずまを元て立
出まバ。月見ゝさ。傷に沖見も呻と。息つき。倦怠足を踏留ゝ。
痛を凌ぎて。過ひ行ぬ強男の婦ゝも思ゝ氣色なく。炭路

と歩して。漸く棚澤と云る一ツの村落に着き。農家を頼みゝく
一宿を求し。旅行の疲労を休めける。爰に三次い辛ふゝて危き
と通也。恐るゝ辻堂の辺りに来つゝ窺見まバ。二婦ハ如何ゝと
覗しゝ。焚火の光も見へぬ。心ふゝねばゝを前を引起しゝ。痛ハしい義
急変の源を。息い速く絶て。一言の辯も。ふゝ。奸賊なゝ。三次
哀と催し。我ゝ言葉を用ひ。此の婦女に係り合さぬ。彩る接犯を
為まゝきに。世ゝ事に百年の命を編めたり。去るほゝも思ろ
ゝさゝ。ゝあゝ有うゝと。猶言いつゝ。仁丸ゝが死骸を葬ら術
も。ふけまバ。傷ある谷間の川中ふ水葬成し。我も京都に返る日
ハ和ゝが霊を弔て。改めゝ吊を成し。哀ん。仏会なゝ成佛ゝねゝ。

死骸に向つて玄葉を述べ。猶去実を立出て。終に道を急ぎ。小舟渡川井やんどの村落〻を過ぎ。沢井と云る村落に出つゝ一泊を成し。又まゝ村に出て。初巳の者乃家に。四五日を逗留して。実に彩所に出で。漸く浦の麹所に辿り成し。長崎に達て。質日賣買する顛末より。甲州路に入て。銀銭を磨たる儘より。殘る方々物語して。暫く休び。旅中の疲労を休めけり。去程に逐世心を籠て。怪地つ。瀾り雪汐つて。まゝ梅の駅に出で。四実に宿屋を借て。逐へ。療治を加へ。薬餌効有て。三日にして全治するを得て。今い氣色ひも〻さく沖見も甲斐〻しく打立。共に此の驛を立出道〻程〻乃雑沓を成し。路の傍に倒れ合ひ。夕べに泊り。朝に歩して日暮ずして京都にあそび着に。逐老い二俵客が宿所を尋るに何実へて越ぬ。昔日住〻家へ跡だに有らぬ。郷もあるわび物を拵へ。コハ尋るに隣への多ならん。身が月の上時雨を先と見べしとて。沖見を将て旅宿ふ宿りを求め。共に心留りある金形の間を探せしに。不図も殺せ云る商人の家に忍び居るを見付け。我実と云て。沖見ハ逐老を伴ふて。つゝも其家に入り。主殺せに向て。具に高義の因縁を語りぬ。元来この沖見が夫ハ其以前お満が為に。常州水戸へ使せ。去隣つ妻の第を尋ハ。逐演沖見を迎へ。妻と成て。又他の婦女に取ま。沖見を拵んとして。氏族姜こ宗清つ等が怨を受け。極く事

故起つて。車輪を乗こに非ざるべし。御手を以て毒も殺婦も捨置已難り商
法に別なると忠の使こ。申物賜母都むさるゝ。沖見ゞ源遠て来ると
捧うつを。日育うらべる面倒あるんこて。又手紙にて屈り強セハ心知りかる
ゝ人をもとばして。来ると拘留つて。自の上を拒て。出家に居まる者計り。
隆也沖見ゞ捧一来ると見て今ハ雑芳あく竟に媒妁の者と謀つて件んの
陰一女と良こ。将氏族の後を宥めて。皆表ハに異見を加へ。渋に葛藤を
收めて。沖見支婦同室に居まるを計ひ。若人も夫に後悔あり。遠世
に向つて旅中の信抱と云術。浸互に交加せん也物。如手紙の無礼なる
也。彼方の人雑居て。出度物授定る妻あり。先来あくも遠世ハ沖見ゞ分内
に帰りて。沖見ゞ物りの人に別を貴文ゞ門人乃家と書相出して。

二侠客ゞ彼所を問に。庶に知る者有つて。今ハ小石川寺内町に住る
由教えたり。まぐ力を活て。速く知り見出べ。間合よく居合ハせ
遠八薄者。遠世と見まるゝ。出迎へて家に使ひの者。コハ嬢様に
在せ。五百年好逸故。間に能も成長あり。青伝せんと思ひ
つゝも。我く色く雑事に紛れ。初ハ等閑に成ぬ。まと知て。社に信ど。
一礼後とゞ二侠客。沙十内の安宅を問に。遠世ハ貴文の死去せ
物語り。自ら悲しと賞して。遠こ二個を使り。身の明元と計らんと。番目
別ハ隠んで。約言の有しと悲とまで。家を知方分て。宅相第と心中色
変りく。遠べ知りて。最後自の三を教けまべ。侠客ハ十内の死去せ
痛こ。悔き面色慈然して。急ける。貴文世を去りなんるを遠さに

在と推し出れば別て時宜に約せず有り。忠義の心ふかく、我輩ら数
度申もの力を添へて主身が責を計るべきこと、今日うり我こゝ家に身を
落付く。夫れ時を待つべし。急くは決して計がたし。最老実な
る言葉に遠世の志の変ぜざるを喜び、始て安堵の思ひを抱て帰る
也。程へも同じくいさわりを同に能き婿なし。備岡の家を起
さしむべしとのこと。外先の事共を語り、茶菓食物を出して饗応す。餐
意し。暫く別座の部屋に遠世を休て、主を解て身を寛げつ。藤平
一城を討取たる顛末を語まば、時八大に喜こび。心地能き事哉。
銀蔵の娘に妻せまほしこと。翌日も及ばざる働きを成しぬる。何なる
犯人の呼吸なり。関東の状、具に示さるゝ間へば、遠世八出発し我ひし

此事八如何なるか。義人全く切腹せしとど。切腹せば同類の城
内某つゝかを添へ、あを討ん心頼りあり。彼りに惜しと思ひ。忠他に
人を切殺したり。さまざまを亜に恐れしや。残る一城半へ近寄ぬ時、私
の見分け難くして。城とゞ見考ふり。宮ゆく数多くの者を働き
つらん。人を近せ難きこと。雪の炎帯り絶まば。博吉八壮蔵を
ると感傷し。嬢様ふたり迎に。組法を習熟せらるゝ。我こゝ為ふ
好む事かり。もとより間有無に。教授を受へし。語八も
笑顔を揚げ。コハ博吉め。宜きを勧めかり。折く教を受んに
と。藤兵衛有く申こに。尽せど。菊也る間日も言わず。遠世こ
席を退つゝ一間乃内に打休し。侠客が家こそ。義人幸蔵。

宅に立ち入り出奔遠山勘四郎に見別れ夫婦の語家を立ち出で侠客の
家に一泊し夜の中に婦人の身を問へり。頼八婦者等雅の履歴を語
つゝ。撃剣に達せし由を告げ勘四郎物ゝに奇なりし法の日業
を試さん抱腹して逗留し侠客勘四郎等度に於て遁世と
撃剣と試むるに業むつゝ達し居れば西の帝の婦人と感嘆せられ
あり。宅に亦彼の神田雑色町に寓居なせし義獄の僕十三年い意り家
を捨げ妻子を捨て流浪と歩行さ一日侠客の家に小汁の高ひて。婦人息
を休め居に廣庭出て人の女三三歳の男とおもとして。俗名なく出分
の形を表ひ居り。能く見まゝ歩ん娘と成て十四に迷はる。迷世に
て出奔有りり。下宿屋の恩ひ忘れば。孤子の終るを待て立ち帰り遁世の如に進

寄り。所を下げ入れと成して。嬢様は僕と共に居ありしと問へり。遁世
は思ひ出見逃つゝ。信く去年の新家を守り妾思ひ出せり。婦人こと
家の父と知る去年後世に立さむ。雅さ時に没く見る。せし洗顔完
居れる妻有りつゝ家内。一ッの墓の上に立ち去年も稚く色まで我
名と名乗り涙て身の上の事歴を押し問へば。遁世は具さに十四の病死。
墓に我身の結髪と抱腹して博吉頼八等の源切の法を知らし。
二侠客をして去年に引合せ。去年家を出て出奔の面を
撫げ又遁世に向つゝ岩を極へ嬢様に実父の僕は悲るを知
りて涙ぐまれ彩く成長有りて通り書中さん抑縁の法父母
僕が面を立る義掛道を帰後と中人の手を猶ゆく生せし時去る

商人の娘と契られ一個の沙汰と儲けまひらせ故有るく好き左に家
不迎へ〻ぐさく歎く孃様をば母祝の手元に預け養育を尽けるが
ち情なく一年を経ぎる間に母祝い身まぐらを足掛すくてい
身をば引取れ去らども養ひ育るに御ちくして後ハ僕に相譚あ
り孃ら身何辛抱ぎみと云成して何日こちり。実如に縁付呉と是
重急の場乃形をくと仰有り僕今を更く鬼地に諸間屋へ我
子と云立く。縁付けヤ好り左ばべ実父乃姓名をば秘し藏し。
誰人も他言せざれば今日まで僕を誠の父と思ひ入も。然程と
ハ云へ〻ぐ程吉事ら世度大事有れば此家ハ悔も多しと云さ
て。偽らんとして扣へたる有様かり。傍に少居たる婦人婢吉ハ

由緒ありける人や知りければ心を利して主人を播らしめ。薬菓
を勧く叮嚀に養ふ。婢ハ先づ孃様ハ姫く聞ぬ迷世慣ぎ重文
乃中業我々い十内後ハ恩を受し身中く孃様の切先外要ぎ
ぐ世話ぎ申ぎ。何ある大事ぎそも姫方ぎ身に偽りも終事を。
主を裏事く此場ぎく苦らぎ事ぎ苦々に力を添人。
幾重ぎも苦事を苦に為ん婢吉を左にはいづやと又此方と振向
き問今せり心中の志を迷ぎ婢吉も先ぎ事ありとく頻ぎ
問と主ね申り。迷世ハ姫く実父乃中業国縁を守得く藤掛氏
ぎ胤なると知り。程一大事と守こうに二使客ぎ申も迷ぎ
を逼ぎ。主年に品言葉を疑惑を情くべき人々に有らぎ妾ぎ

聚栄堂蔵版

に傷りたる大事。速々呼吸を〻少まゝ緩し。涙りねとれ〻押し回して。
言平今ハ心乃疑ひ解け〻。三人が弟に藤を進め歌き悲しゝても迫
らざるを。父乃死事なりと。見こりを事の落涙稚々の災
事。殘りなく物語りして。双の眼に涙を浮め齒咬を成しゝ何年
人殺しの成を探し出し。舊主の汚名を雪めんりのとし心を摧いて
雲探る最中なるを。宿志を述終つゝ。程徒永左一郎と云る智
士媒狗乃因縁有〻。涙く兵力成を乃由詳に打明け者杉を迷
世ハ見を守こり。了後ハ悲こ了後ハ念〻回〻落る涙を拂つゝ
云稱を妄己り養父の十四年を悲なゝ見送りなをゝ者ゝ
実父の恩少しも返さゞ呼の一言を耳に入るかゝ涙もに心

腸を摧ひゝ。甚の誠を穿鑿せん吉を乃恩義を忘まゝて。
甚仇を報ぜんと為る。僕さ人有るて自殺を久つりなる父乃怨魂。
慰さめゝ〻て亡べきくハと逆ふつゝ眼先をとゝぎ拳を振る
有様に。元より義氣有る博吉種ハ肩肘張らして主平が方
に進みこハ聞捨ぬ大事ゝ我も今より力を添ん義撫氏
ハ見知らぬ人なれども迷世間乃実父ゝ有らば共に仇を報ぜる
も嬉稱への恩返しゝ主平を力と落まゝ〻ず見こり心を共
せん云世でも對決為ゝ相手ハ國の村井長右衛門。我〻宮次松
と云る田舎兒ゝ為に。這奴と雖ゝたる事有り。手事数たる
如ゝくこの論争に〻。水中の業ゆゝ成さゝめゝる有さと。砂村

へ引出したる。顛末まづくを具に示し。思ひ出すに長谷が悪伎倆より出しむとめと。今に片腹痛く思ふべき。一人殺も返答が為業也ては有りさと疑ひ問へば。真平ハ面を振り。左に非ずと僕ハ思ひ外ありし。何かもせよ横死する十兵衛ハ長菴が実の弟。如何計り不仁不義の奸徒なりとも。今の怨の為に弟を殺害する挙動をもいはまじ。兄弟ハ他人の始りと云る譬へハ有もとど。彼乃兄弟不和の由も何らむ自ら思ひ知え兄弟と他人との差別。情愛浅分見バ異なる所有んと説たり。韓吉殿と膝をおちら。実に和殿が云るこそ知人金言なれ。我とく宇治松が事故より思案独に浮み。何ひかあへしまでし。長谷が所存さらがなどそ腹立つのめと。其罪を詰し。丁度未の刻時なり。彼の始めに一盞を酌んでそ韓吉ハ独ぶとも共に自ら立て酒肴の用意を成し。遅せず真平等。紐つてなりて盞の数を侍へ酒酣に至りきバ真平改めて二個の侠客に対ひ彦根氏の了子道を助成とハ嬢様後達の姉弟へ殊更お満度も有り此の大事に加わりたる方と和殿達を始めん山供申して請求氏等に宿悪等へ引合せ度存るし此頼と容まるつて僕とも幸也と勧ますも。二侠客一議にも及ばず承諾成し。能も心得もなりと。事を討るにハ人を見知り置ざんバ有べからず。衆人集つて考を備へなバ上もなき智計も湧出せん。如之姉弟で彼の面会も無きハ不都合の次第くし。拙延終らバ此身と共連て。逆世殿を伴ひ。

赤坂へかへりし。小梅へかへりし。今日の内に一方の。初對面と成さしめんと。
意なきもせバ。新平ハ思案なし。忽地に我形を容をかへることぞなかれ。
姉弟の面會ハ此の報も重り。手間とれる事のけいん。コハ後日の序を
見合。今日ハ先づ小梅におもむく。左三郎彼に對面致しやさるべし。僕樵
徳永氏に問合す事のいかにといへバ。二俠客ハおもひつき。野で飲食せ
済けれバ逐世に容貌を被改へせしめ其身も美服を着して伴ひて
春日町を立出る。新平が案内に随つて小梅におもむき。四名左三郎が宅
にいたつてみれバ。彩る見るより左三郎座近く新平を喚て客人の
様子を問に。件にくの由を告けれバ。お鶴も心を利して三人の
客を一間に請じ。先づ茶菓を出して丁寧にもてなしぬ。

左三郎。新平と共に客間に出来り。逐世と俠客に對面して。通常の
礼言終れバ。新平ハ是に逐世が来歴を告げ。又二俠客が逐世に因有て則て
大事に合力するの志を逐語り。相深人秘服多あるに誠を表し出さんとする事
早なるべし。喜悦てなまぐと云へバ。左三郎笑を含みつゝ二俠客が勇壮なる
面魂を見て心に用ある変有と謀り。覆掛が葬事を物語し
て。怨魂に報ぜん宿志を示しぬ時に。侍者ハ一會して。徳永が薬餌を推し
けれバ。遂を出て問ける様。先生才能を既に整なれ。何故に覆掛氏
が穿死せざる内に救ひ得ざる。僕由来を問ふ實もなくして
雖もしれバ。左三郎ハ面を垂て。然問給ふも。我其時宅に有バ救べき
策も有んなれども。何ぞ謀らん此方へ旅行せし留守の間なるが。

を將く生年。死を決せし儀。ぶく〳〵流涙ろ〳〵。我迚も生まべき者性
果て生き人と成たり。何んとも爲べうもなく。是御に天命なり。諦めぶべし
一夜の人筆乃爲に究屈に落て非命に死を。義掛氏智者〳〵とべくも。是
一決なり。筆を去を迚とりどんだ。は雖に迚べうもぶ。土月等寺始め。是物の
遠夫離く。泣きせもぶんだ有べうもぶ。又後人の戒くと性移り。は徳永
左一郎始めくの面倉と雖も使客ぶ藤助の妻うんを嘉〳〵。筆によ
をく訪る爲を發しぬ。實に人の世に変まる。雖る絡く寄るの情交際面
年の出き。少きと云夫はるい特る郊に非ぶとべくも。は類後世無〳〵と
云べうもぶ。姓名の紋後日證を成すの品。泣言を爲ふて。落恵を拒ぐ
べ。大凡狭獨の記るゆるとを弥にまるに有。情ぶ夫を戒める。

第廿四　一月の流落毒婦他郷に死を

左一郎ぶ答ふる変傳有り風有ぶく。肩九を脱まそ〳〵士を思ひけまべ。
性人も又性くの疑いきを問ふに其對人水の流るぶ。二使客大に
腹後〳〵見るの術を使ふて。遍世ぶ浮人な
ぶ〳〵も志を合せ義く武術の嘗を有を若ぶ左て郎源ろうす
脱去成〳〵。速く古滿を流ぶ等に對面を爲ぐべき事を示しぬ性
稽後りけまぶ。左一郎酒を勧へ。
まく四名を春日町へ迚ら〳〵めぬ。斯まべまを年も夜を使客ぶ家ふ
ぶ〳〵。結且三人を將く。赤焼て起き。先づ黒酒を〳〵助に面倉を成さ〳〵。
毒〳〵三個の身乃を歴因縁を知らせけまべ。おみつく泣く〳〵脱び。迚世

ゞ夫の義亂れ乱れて治まらず。是信力に思ひ遠世に成りて云ふ様は、
身ゞ如き血筋の嬢娘有らんと云ふ事に成らざり。他の家に妻と
成るとも。郷君妃類に成り憂患を苦にまゝ。今まで平生物語りに
十岡先生の源員と云て。法岡の苗字を継べき男子。若ゞ家を
乃出て妻ゞ夫世に有らば宜き婚の世話をもと云ふ事の
生平い進と出来ゞ嬢様の身の上は世間に成る。姪八
樽生活度兼く[illegible]尽力成し[illegible]賢の[illegible]家に計いを
[illegible]も兼ての大望。他まゞ力を添んとの志芳志。身を慎に栄
されよと二俠客ゞ宅に於て言伝せしる[illegible]有り。他に帰りけるべき満足を
[illegible]感に感じ。不見袖を絞る物語。道く助ゞ婚初に[illegible]も来へ

来つゝ二名に対面と成。夢ゞ二俠客の志を聞めもとり[illegible]物語
の中に姪八心付き[illegible]知りて[illegible]。十五郎ゞ
見る。村井出張彼こそ[illegible]推る知者。放逸懶惰の輩
交も出来る仲にゝ。殊に長田と[illegible]る婦女。稼ぐの仮病と成[illegible]
しゝ。蟠[illegible]長屋ゞ家に交加[illegible]。少しなゝ大[illegible]心と苦に
助と成[illegible]推しなり。其の如[illegible]。[illegible]き探らば城乃系
口ゞ出[illegible]掛りて[illegible]んと我こそ二個宮次松と云へる田舎人
に相譚人為ゝ事者ゝ。[illegible]面出張ゞ宅と窺ふ[illegible]。
[illegible]時と迫て組[illegible]る勝と知[illegible]押[illegible]。初も奇[illegible]と[illegible]物語。
宜ひゝ長田ゝ[illegible]る女ハ彩容年の[illegible]ゝ考へ[illegible]。我ゞ[illegible]良[illegible]へ

不法を働きたる。毒の長田にてい毒きう。蔦が一毒者なるべバ。心に掛て雲霞居る曲者と我為に先ゝ行を初しうつまこと問ずゝ。其時婦人も座を進め。長田が面容委敷語つゝ。年の頃三十ばかりと云出せば。容貌美麗の双の美を。おちの毛を女なる。我為人長田に行ると事有るほど。面くまぐ事故と知りあらばバ一通りを告げやゝく法長りなど耳に入ると。直ちに連田が出立妻と成て。お満と非道に扱ひ。まの金銭を奪ふく。密男と共に其の家へ忍ぶ来る悪巧。其に道を命ゝ。手地に探りまつゝ。毒婦と捕へ縛て返し始め終り。最も細に陳述せるにて。理八分終て中務を長田と云る女出しのゆくにて。和泉と義掛氏を。ゝ。

鼠の猫を避るが如く。ゆくゝ知るべし。殊に武士たる人。我身の浅慮を悔げんが為に。何家る伎倆を謀りくも。思ひ出せば疑ふべき曲者が。我ゝ吉治が家乃儀り徘徊せば。迷つゝ宜しきぬる。有りこバ方法と。平生ゝ智を磨ひ。迷ひ安に近付く。策を探り見るゝ。信り。百折千磨に商賤を成し。たゞ世間苦に。お満ハ迷惑を近寄せて。袖と縋る長物語り。果しなけれバ二俠客ゝ。平に向つゝ。周旋却きと知し。法の面倉を結して。長屋つゝ。お満等に別を告げ。迷惑を憐て別を返りける。疾悪乃報ゆるや。天長く敬ゝ。恐ひ又も身に来る。二俠客ゝ不図活出しつゝ。長田を窺ひ。心頼りに。参り。無平と謀ゝ合せて。長田が宿を探りつゝ。

桶市
ささ

長田や
謀て三次
桶市を
雛ぎ
三次

夜くちく昼となく。狂ひ癒えに成程家内淋ろにて。長田弟岡も安
堵つかず行こ居るを見掛けり。昔日の悪事を思ひ出で。心中恐怖おけ
ども夫の言葉に身を逃れもん高藏と成。再び面会へ落めん計ど。
湖を迷ひ。結もこもこ言葉に廣法邊鼎せ〜うり。を迫つて淺
まに金銀有らざれば何を施さんゆも御計かく。因て第〜悪徒に。
此面と高の儀成せば悪戈尖き長刀勿論に工夫を凝じ。一笑おく
恐ろしき極ハ絶計の妖害ゆく生恐るに落らん。去かぐら極さハ婦
人の心苦に病せ者ハ正使なり。我出入する病家に美形と呼べる男
有り。近所源川の仲所に引移りなり。立働の婢婦一個と欲おくこの
者ども有りも。安も放也幸ひなれバ対家に頼け者ハさん必らず知。

事有ぐうず。其間に我又置き湖と常。浅ろ者き方策を運ら〜く。
二人を同中に置ん。常人ハ心有らぐ。今青連ハ〜て平家に落さんと示
せ。こ〜ハ密に探ど。彼く長田に訪ろく。源川へ行ん中を色しめ
かるを長田頃業〜く中に長田を体ひ先づ美義ゆ家に入つく。
長田を執調さ〜。夫有る身の中ハ源く陸の氏族の者ハ藤
中く。奉公ハ常人の望こ有る郎に知こ〜。美を引受るの無辺に仕
て迷けもハ。尊藏ハ日頃心安き長庵ゆ頼に何の疑ハ無ども。一
言の漢話に長田を抱く。彼く義面の天化を常人に示〜て。彼ハ
色欲美義舞業元〜り鄭屋の世渡りあるに。通法又別に割愛の者
を開き。二業別く繁昌せり。長田く常人と行〜ら〜通法の外に別

居たりけるとぞ。尊氏其用ゐべきを知り。料理の店に至て酌人客の取出しと成さ志。萬藤の生する。奥の遊んこゝて逃るこゝ能はず。

へぐも又其る家に二侠客に雇れ。水中を潜りて漁夫の捕市八日く漁り得る。大小の魚帯に尊氏ら宿を持出つゝ主人に与へ

し。家の男共等こゝ薄なく難儀と思ひ。或る時は二杯の酒を呑んで時を移し。逃る事。数回あり。しかる此間冷妻こゝ離別して独りゝ

淋しく雲に泣ぐる。彼主の婢女富が富り能く。且は面容の美なるに心頻りに動き。年こゝ我り語つゝ斯の如き婦女を羅ひ求めて

妻と為ん。世を面白くゐるに可きは。或時は富に酒を成さしの酔に紛れ我心中を物語り身の履歴を問ひ。富は其情乃

憐れみ。尊氏に合せ捕市が逃りし跡を探るに。知るべき者なく。不思議に堪へず。捕市こゝ類に多歴き男

にて。終日只家業の事はこゝを勵まず。且に狂暴なる癖も有らず。近隣

八貪欲と見るまでも金を貯へ持て居り。此に稍々成て。さこゝ物

時に。かゝる身体の男を敬ひ。冷く。扱く。妻こゝ成らば仕合を待べ

んと。富と共に尊氏等の悪巧を出せしこゝ。富は捕市に計を生じ

し。倩々思ふ様。這奴貯の有んと上は我恩者と浅く敬ひ果せ。一旦

妻こゝ成く。家に嫁入らんこゝ。富に捕市ら。金を掠らん計を密謀

居つゝ。又見付られる。田舎へ落行んにも其村の漁用等支行ず。長居

主人に怪為に出るへ世話なしこゝ。吾の如く他人の主人の店に

て、高き声に見わらさんも、計り難く、然るまぐ〳〵、そこく、情い
楠市が見るまでも、毎ふ矢者を振ひ、色にうけく、遊び流けいたらぬだに
んなく〳〵心中を義えせ〳〵楠市忽地魂を奪れ、いつく〳〵泥まず中さい
成なりに、楠市は速く家に金まんるゆを付り。紹元に掛合〳〵。博奕
ん商儀と成せば長田計成とり〳〵蔵に悦びも日暮方より思んで
麹町に、もり長屋に逐〳〵。楠市と乗きゐる〳〵情まを告げ。金〳〵金を
揺出さん較計まて斯に欺作り〳〵なれば。件の男我身を賣ひ取んぐ為
に来る事有りけん。和尚茶を呑迄色〳〵接待を成〳〵みつる
べ〳〵嫁して後今ぐに掛り賢へ仕事を蔵者の種を尋き日為〳〵離
別まく〳〵。家と郎と中ん夫に知〳〵べ快〳〵思よまて。コい和尚ら

猶の中に泊め。妻が計を新ら〳〵め呉〳〵れと云ぬ長者の眉を
潜め。和尚は悪性例き婦女なり。左い云へ能も今の蔓を撫〳〵
嘗ぢり。吾侮〳〵く男なれば。引張たるぞ。其男来りたらば逃べき
意せん孫に木陰の庁隅ある住居に。身を忍ぶに逐つく好り。
三次ぬ旅に云ひ〳〵ん。速く逐つく首尾能く。較計と為果せ
よと。暴悪殘忍事さも為ざる長者一言の中に受引き抜つて
長田を逐〳〵ぢり。安に逐つく長田。楠市に逐ひ男の引張人材并
長者を引せ〳〵る者て通りを説ぢり〳〵。物に通ぐたるく〳〵絶へ
と入るに及ばぬ。前ら訪て面会し。て為書よべき中を宿らば異議なく
る海んり掛合妻能く成〳〵。来まり。男者の婿を引け。

聚珍堂蔵版

呉〻〻も勧めまゝ。楠市大に悦びて。直く勧賞ふ却き。長活に逢て
委細を書げ。竟ふ書ゝ〻第を元極め。箕郷が家を暇とるまゝ
べきに遅びを歳ぬ。彩〻出田彩に楠市が家に嫁入。日夜夫が機
嫌を取て。金を揺出さん術を成るに此の楠市が生涯なる。節倫
を守つゝ。中に任賃をする勤地なく。百結乃衣を身にまとひ。
日々貧家業のことを出精して。身の疲をたる彩に一杯の酒を
飲まるのことく。昔バ世を彩る業ゝ世を送るとも。少の人を驚かる
るを。ほう。色に金浪のつゝい交に歌きに常ゝ彩バ。出田に較計六
に遠ひ呂巻を墨て。妙計出ぜゝて。或夜又出田が許に行。呂等の
事を物語りて。湯を問るまゝ。長活大に笑ひ。和を十分に歌て行る

し卓言を為しに有らずや。初歌の心きりかゝる音曲なる
者ハ中を以金を出をべゝ。一計なり。こ活に頼まと問ゝ。富力なり
さく暴に掛合を成さゝめん彼を和とが色者に逢ハ居る田なわ。を
切るの印を書べゝ。金を三次に取ら。活に為故を起て家をとる
去り為ゝ十分なゝん。方に決せよと勧めたり。長田思案ゝく意に
為ゝに過の密計を伺ゝ合せく。別を返り。色ゆも彩ハさんで
楠市が接姦をとりて。心中こ次が事を結居り。出活ハこ活を
招ぎ家を世藩計に偽く長田が漢夫楠市と呼ぶ者の伴へ嫁をく
る。始め活りを為に流市。接已が長田に勧め一策を活つく。
遠奴吝番ゆく金の事長田が歌に常ゝ。和を平生の事を書て

聚珍堂蔵版

強き掛合とせよ御ゝ[illegible]ゝ婦人きる時。桶市我に贅沢ゝゝ。
長田と貴いん事をたへり。則ち氏族の老乃娘ゆく。引文世話成ゝ
亜由に知られ夫なるを陰して半ゝたるをわれば這奴ならずまつゝ
去家の連ひを遣ゝ我を離せん。色を逃る策考ゝ有り能く心に義をて。
十分に掛合へ。酒代の種ゝ成んと示ゝぬ兄等の不心事と思ゝ成ゝ
帰る三次小羅ゝて雪ゝ彩る掛合別居ゝ有り。始めに嵯ゝ威ゝ疎
八臨機変に掛合と為ん。首尾能為果せゝ見せべを拘ゝ。色
ゝゝて折ゝ桶市が家を窺ひ長田八三次ぞ来らんと渉り。密に
意表る間ゝとを操ゝる内。或男紙と[illegible]ゝ三次。長田と見ゝ
徹と睨め汝如何にて中変に有ぞ。夫の眼を晴は。密男と拵。形義有

掛つゝ二人言ゝ帰るゝ。不敵限り事。因に掛るゝ八。千産に[illegible]雑ゝ
と云さま。居直つゝ情ゝ手拭に色なる出双尾丁と九歩ゝ畳べつ
さゝ刺ゝ繋ぎ。又桶市に向て好を義ゝ[illegible]ゝ和ゝも主有る女を知て。
引入とたゝん中を。先悟もべ。斯八云へど我心疾き老に非ず。迚も
心の腐りたる女再び我物ゝ成んゝゝ思ゝ。清く和ゝに呉事
ゝ。去ゝ[illegible]ゝ長田に八言ゝくの金を貸ゝたり。思八進ゝ雑ゝ。我
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ廉を[illegible]ゝ。[illegible]に引受ぬ。左有らば我ゝ妹ゝ成ゝ
て。和ゝが拘ゝ成さゝめんゝ。[illegible]ゝ切れの金ゝ云ふ計りに教風云べ。
桶市ゝと[illegible]ゝ[illegible]ゝ怒ゝ我長田を迎ゝるに雑ゝの他ゝ出る
[illegible]ゝ。稽り[illegible]ゝ。[illegible]に掛合書ひ[illegible]ゝ

斬る事を当人に我も合点なり難し。長右ゲ家に引揚りのち一
倫と云人の女房を携へ来る和尚心我を密夫と思ふらんを
づて云ふも為まじ。物も見事に我前にて長田を殺せ我海
殺さるべき理なけれども今こうして二十合戦うんと衛と云て家の裏へ
出ぐちの南に削りたる堅木乃棒を取出て右の手に持て相
手と成て勝負せんと数度進み寄まろ。二次ハ此棒にて審
汁大いに翻弄ひ懲に氣絶き他作事を吐き。今更桶市と死合
ん事も成らじ。何に弱ハ口を開うんと。なめらかふらち長田ハ多の
能らざるを悔り桶市ゲ書に向に簡単旨の内を述く撰。
三の狗乃合十五円の包を渡て懲に今と書にうり初を

もこいぜ。逃出し本丹の辺に紛れ隠れ潜り。こゝに於て潜り
掛合べき二第と乗ド出出庵丁ハ元の如く懲に納め。先達て
桶市を女と殺ごして。和尚と我とこの切合て。何ら せん一旦ハ命り為合
殺さん心中く事なれども。哀しとゲけバ和尚ふも一理有り。殺婦が不貞
心より出し。皆度く長右ハ元より知る人なれバ兄より至て掛合を
成ん。事也ど已ゲ汁ひゆく。和尚ハ縁有なる心得ゲ呼ゆ子細有る免。
我ハ殺ゆく倫ゲ見ん。和尚も理を以く長庵に料合し双去ゆくも
女ハ逃しに非ぜ。兄より二個長田と云へバ桶市ハ冷笑ひ。
和尚ゲ理非分解り。二ハ打合んも餘変く婦女の逃出しハ兄和尚ゲ
為し。処く光に通理を説云ハぜ。只理不尽に丑物を出し。殺害

成んと勢ひを張るまでこそ驚き恐れて逃散し行り。あるいは人々の憂
事なり。元の如く我に渡せ。其後近る事習ひ我掛り合と為んと更に新
な無力に二郎治者ども如と言葉し者つてのち長右衛に掛合せんるを
逃べきとなく二郎治は富田が桶市が家を逃出て四方目と絶乃
家に泊り居りさ或は長右衛門が桶市が合を逃出て三次に逃ひ先
様と極めく告る極ハまいげ民みぞう桶市が合を奪と歩
行り。逃奴等の内と陰め見ぐ合の紛失我業と成て。頻りに言るる
と為んに已に長右衛門し桶市の吉二人の怨敵と愛多と成まり。金右衛
始に見ぐ色雖し。是ハ以前へ盗り行る。主蒲に走り行る。愛
又剣豪庵乃婢奉公かし成して。暫くと送り居んに安居ハ折

々通達とん。沢さまにも序有ば。雲ねまくまくして二片の金を與へ。
長右衛門留むるとも学れず。旅支仕る。常の路也で去る。
桶市ハ長田を待けるとも。見に過り来る。彼の金を改め見るに。五
国の色紙失ちう。是長田が為業と忍付れば今ハ逃ひの辞も解く。
皆我晴是ちう中〜災禍と諦め是ハ長右衛に云送つて。更に関係
せざり只頻に猶り家業と励んで浅草他の女を迎へ老後に至つ〜世を安
く送りとなん。扨も長田ハ瀾りなぞつて土浦に至り。墨て知る料理茶屋
に足と止めて。的取女の奉公と成〜。暫く客人の相手と成て浮きたる
業に日を送るうち。胃虫の艇一と成る博徒に別荘又別居る色香の
縛と振つく。夫婦の契約と成〜。金と誓さるるの形面ありしが。艇一

長田が爲に淫に大いに怪と嘱し汚心甚だ以前の如く驚き入て長田名
地位の情を推して竟に艇一と捨て新に比左郎を傍の間に別業和
ぬ艇一見と呼捧つゝ腹を立て事一方ならぬ長田左郎が家に忍び行と。
路上に待伏して教唆の或者羅り捕つゝ引捕へて拶すて咽喉を深く
刺殺して傍なる川の中へ投へとぬ。嗚呼恐るべし悪報の周く来
る愛天人共に其罪を責て斯て稽死を逃さる抑梁田が妻と
成しより茲十有餘年一日も善事を行と為ず。佞奸邪
智の謀策のみを企て竟に三十七年を一期として他国に汚名を遺す淫
婦に婦女子の戒なり

大岡政後　村井長菴調合机巻之十終